

第1回「都立文化施設のあり方検討会」議事概要

1. 日 時：平成18年7月31日（月）午後2時から午後4時まで

2. 場 所：東京都庁第一本庁舎33階北側 特別会議室N6

3. 出席者：福原委員（座長）

草加委員

小林委員

高野委員

原委員

福地委員

吉住委員

今村委員

杉谷委員

4. 次第

生活文化局長あいさつ

座長選任（委員の互選により、福原委員が座長に選任されました。）

意見交換「テーマ：東京都美術館の現状と課題、役割・機能」

5. 主な発言

- 31年前に建設された。若手作家の登竜門として機能していたが、現在は美術館とともに出品者の年齢も上がり、中高年中心となっている。
- 東京都美術館は施設の老朽化が深刻であることは無視できない。また、全ての団体が国立新美術館に移行できるわけではなく、全体の4分の1にとどまる。依然として公募展の利用は東京都美術館が大半を占める。
- バリアフリー等必要な改修は行うべきだが、まず東京都美術館が果たしてきた役割を振り返る必要がある。
- ハードだけを考えると、上野の立地にありながら、自然環境をどこまで活かしているかなど考える。現施設の建設当時はそれを考えることはなかっただろう。自然との共生がないと感じる。都市の屋上空間に緑がない。新しく作る際には上野の森との一体感が必要ではないか。
- 都立美術館で新たな事業、やるべき、やりたいと思っていたができなかった事業ができるようになった。そのために施設を改修するのであればわかる。国立新美術館と競合するから、機能更新しようとするために施設改修を行うのであれば税金の無駄づかいではないか。まず何をするための施設かを明確化する必要がある。
- 東京都美術館の果たす役割を考えていけないといけない。評価課題を整理する軸があると感じた。「美術界のなかでどういう役割を担っているか」、「どういう美術の領域で役割を果たしているか」、「根付くべき地域が上野か、東京か、全国か。どういう拠点的な役割を担ってきたか」、「公立の施設として公募展は開かれているのか、開かれている程度を見直すべきではないか」。これら4つの軸から新しい東京都美術館のミッションが明確になるのかなと感じている。
- 公募展は、これまで新人の登竜門であった。他の美術館にない特色を色濃く出してもらい、多くの方々に愛される美術館であってほしい。
- 今の建物のまま、電気、給排水を入れ替えるとなると、大変であり、休館する必要がある。建て直しても休館が必要となる。休館時の公募展の休会・開催代替が大きな課題でもある。

- 2～3年休館することは美術館にとって活動の休止を意味し、多くの団体が美術館を離れてしまう可能性が高い。休館しない方法で、段階的改修が必要ではないか。
- 収蔵品、すばらしい芸術を見せることが美術館と思われがちだが、美術館の本当の価値は、どのような活動が行われているかである。収蔵品がないから、ちゃんとした美術館でないとはいえない。現在果たしているアートセンター機能をさらにブラッシュアップすべきではないか。①若手作家の活動支援、②企画者・キュレーターの育成、③子どもの教育、④アートセラピーへの取組などが考えられる。
- メトロポリタン美術館は単独の美術館として、理事会、館長、学芸機能を有している。東京都の美術館はそういうシステムがないまま運営されてきた。理事会といった大きな決定権を持つ組織がない。東京都写真美術館の場合、何がすばらしかったかという、実は、当たり前前のことが当たり前に行われたこと、運営諮問委員会があり、外部評価を行い、諮問委員会が示した方向性によって、キュレーターがプログラムミックスを行ったことである。
- メトロポリタン美術館は、リーマン氏の作品が散在しないようコレクションを集めたことに端を発している。東京都美術館は、公募展・共催展の機能だけで良いのか。都内・国内でさまざまな方々が生涯かかって集めたコレクションを散在させないための役割ということも考えて良いのではないか。
- 建替えか改修は不可避という。その要因として建物が劣化しているとのことだが、あわせて機能としての劣化について見直すべきだろう。まず公募展・共催展をどうするかを考えるべき。これをリセットして365日の新しい事業を考える必要があるのか、空いているスペースがどの程度でいいのか。今東京都美術館のミッションを再考するよい機会でもある。その際に一度決めたミッションは生涯背負わなければならないものではなく、時間軸の中で短期的・中長期的に見据えていけばよい。

これまで、需要がありそれを満たしてきた。その需要に応じてきたことから、公募展・共催展に対してお任せ的ではなかったか。東京都美術館が主体的に係わっていく関わり方を模索すべきである。

以上